

# 三河アララギ

平成二十六年

九月号

第六十一卷 第九号



ニューヨーク日記(95) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

July 6, 2014 : The Color Run

## Blue Shoe Diaries



カラーランって言う物に参加してみました!選ばれた為のチャリティーの為のイベントで色々な場所があります!これはブルックリンで。色のパウダーを通過地点でかけられながら走ったり歩いたりの短いレース。コース完走後参加者も色のパウダーがもらえて皆で掛け合ってパーティー。インドのホーリーからアイデアをもらったんじゃないかな?ものすごく汚れました(笑)。でもこの姿で町歩いて地下鉄にも乗ってしまいました。楽しかったよ!

So we participated in The Color Run. This event for a selected charity (Children's Cancer Fund this year) that's been happening in many cities all over the world. We went to the one in Brooklyn. You're supposed to run or walk thru a short race where different colored powder is thrown at you at each check point. Once you complete the race, you get your own colored powder and you can throw it at your friends and have a color party. We ended up getting really dirty from head to toe... but a lot of fun!! My guess is that the Indian Holi celebration must have been an inspiration for this? Anyway, we ended up riding the subway and walking the streets of Brooklyn in this colored up gear for the rest of the day. Fun weekend!

# 目次

## 第六十一卷第九号(通卷七二九号)

表紙 蓮	ニューヨーク日記(95)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	歌集「スモン」
左光緑	富士山
蚕飼ふ	故郷の海
蠟螂	笹百合の花
揚雲雀	地球に
瑞瑞しく	鯛の大群
空如師	科学と自然
守宮	茅の輪くぐり
夏至	七夕月
母校	夫が居ぬ故
鷺草	花托
御衣蟬	大磯(1)
稲妻	初夏
初夏	

今泉 由利 (1)	Blue Shoe (2)	大須賀寿恵 (4)	岡本八千代 (5)	今泉 由利 (6)	弓谷 久子 (7)	青木 玉枝 (8)	内藤 志げ (9)	林 伊佐子 (10)	安藤 和代 (11)	遠藤 脩子 (12)	胃甲 節子 (13)	鈴木 孝雄 (14)	足立 晴代 (15)	伊藤 忠男 (16)	富岡 和子 (17)	森岡 陽子 (18)	清澤 範子 (19)	近藤 映子 (20)	半田うめ子 (21)	杉浦恵美子 (22)	平松 裕子 (23)	山口千恵子 (24)	小野可南子 (25)	夏目 勝弘 (26)	阿部 淑子 (27)	白井 信昭 (28)
-----------	---------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

『歴代天皇御製歌』(二十八)	『ことよせ』	『俳句』	私の一首	ある自然科学者の手記(28)	絹の話(46)	物理学者と詩歌の世界(56)	短歌に詠まれた茂吉	楽しい時間(22)	酔いの徒然(28)	大磯(1)	「氷魚」のことから(164)	ことのはスケッチ(429)	編集室だより(二〇一四年七月)	和菓子街道(95)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定
----------------	--------	------	------	----------------	---------	----------------	-----------	-----------	-----------	-------	----------------	---------------	-----------------	-----------	--------------------

貫名海屋資料館	いーはとぶ	植村 公女 (30)	柳田 皓一 (32)	小柳千美子 (32)	森岡 陽子 (33)	小池 清司 (33)	安藤 和代 (34)	胃甲 節子 (34)	小野可南子 (35)	清澤 範子 (35)	佐藤 喜仙 (36)	杉浦恵美子 (36)	鈴木 孝雄 (37)	内藤 志げ (37)	大橋 望彦 (38)	今泉 雅勝 (40)	今泉 一石 (42)	鮫島 満 (44)	山本紀久雄 (46)	丸山醉宵子 (48)	夏目 勝弘 (50)	岡本八千代 (51)	今泉 由利 (51)	平松 温子 (55)	平松 温子 (56)
---------	-------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

けふもまたよきことばかりと言ひあひてつひに朧の眼の泪ぐむ

P 1 2 4

撓み乱るる先にはつかのくれなるはわが秋萩のはしり花なり

P 1 2 5

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

治癒るまで十年かかると聞かされて麻痺せるわが足引ずり帰る

廂より吾が引き出だす自転車に蜘蛛の巣はれり朝々にして

竹に生なるごとくに雀等の声かたまりて静もりゆきぬ

## 左光線

蒲郡 岡本八千代

朝の光この左光線の明るさよ机に向かひて何をか書かむ

久しぶりに人をば赦す心地して机の前におだやかなること

くれなるの百日紅に吹くけふの風家の中までくれなるの風

百日紅の花くれなるのゆるる中鎌倉よりの君の宅急便

今宵より新しきタオル下ろさむよ夫は曾ぢいわれは曾ばあと書きて

三四日時々意地悪の夫の留守われの自由も少こしくさびしさんよつか

母のほかわれにお母さんと呼びぬし人ああ君の五十年忌今日の徳源寺様

また我に兄様とも呼びぬし人ありてその人の十七年忌も

徳源寺の境内の隅に相撲部屋の「修古館」ありたるにわれの驚き

夏場所の相撲の旗の五六本ごろうほのはためくを遠く見つつ帰る

## 富士山

東京 今泉 由利

見聞と経験実見重ねつつ今日の私に湧き出づるもの

富士山頂火口の泉の雪解ゆきげの水に富士山描くひとになりたい

三条の鉄鍋一つ加はりぬ永久とわにあなたを忘れはしない

五十嵐川の砂鉄にはじむる鉄鍋を満たして今日はパエイジャですよ

濃く染めし藍の色して今日の空細く鋭く上弦の月

人間も馬も車も立ち入らぬ奥多摩深くヒメボタル生息

蹲つくばいに一滴一滴落つる音等心円を造りつづくる

ひとり来しひとり佇むひと所タイワンニンジン木の小花降る降る

てのひらにか細き動き伝へをりミンミンゼミの一世の終り

ジーツクツクツクツクツクツクツクボーシ ウツクシーヨと私に聞こゆ

## 蚕飼ふ

豊川 弓 谷 久 子

大型の台風近づく何と無く心騒ぎぬ今宵たなばた

朝刊に読み継ぎて来し小説の親鸞上人遂に逝きたり

三部作すべて読みたり寂しさと充実感を我に残して

わずかなれど親鸞上人知り得たり我も門徒のはしくれとして

桑畑に桑の葉摘むが我が仕事蚕飼ふ家に我は育ちき

蚕と共の生活なりき絹の話読みつつ憶ふ故郷の家

気比神社に芭蕉の句碑がありたりと土産話を子はもち帰る

遊行上人の跡訪ふ芭蕉の句なりきと奥の細道子に語りをり

螢舞ふ里に住みゐる君羨し螢住まざる我が御津川は

ともりては消ゆる螢の儚ない灯蚊帳の中より眺め眠りき

## 故郷の海

新城 青木玉枝

山里に二度目の夏を迎へたり去れど都会へ帰りたいたい今

わたしには静かな田舎の住居すまいより都会のリズムの中に生きたい

独居の明け暮れ空気のうまさより雑音に生きる力がほしい

歳古れば誰でもたどる道なるに出来得る限り若さ保ちたい

朝食が終れば朝礼始まりて今日のひと日の行事始まる

所長より朝の訓示に始まりて体操合唱最後は牛乳飲み

一日のリズムの中に身を置きて一年すぎて又猛暑の夏を

人一人会わない山里土手の草ふみて朝の散歩は終る

自分から好このんで伊丹を出てきたのに今更帰れぬ悔いの涙を

故郷の海が恋しき毎夜さめて涙一すじ頬をつたわる

## 蠘 螂

豊川 内藤 志げ

涼みゐるわが足許に数知れぬ土に目立たぬこにしき草が

砂利の間を動く小さき小さきものさやかに見れば蠘螂の動き

いと小さき土の色なす蠘螂が草を抜きいる手先をよぎる

わが指を逃れて小さき蠘螂は跳びたりそしてはねて行くなり

小さくと目玉を掲げ跳びはねて逃ぐる蠘螂愛らしきかな

電柱の高さに止まり騒ぎ鳴く鴉はわれの西瓜を食みかけ

坂を下り廣き所に出づる時涼しき風の通り来るなり

夏葱も夫と嫁とに守られて市場に並ぶ縁際立つ

冷したるタオルを頭に首に巻き休み休みし葱を束ぬる

焼酎の瓶を傾け後僅か自己流なりし野ぶどうの酒

## 笹百合の花

岡崎 林伊佐子

笹百合の優雅な花の香りたつ夜のしじまは二人の静寂

林道の若葉あかるき山坂に木々の声する風のかゝる

足もとの螢袋の花咲きてとびきし蜂が首をつっこむ

週末は旧家を守り草を刈る庭も山路も夏草しげる

営農は継ぐ人もなくふる里は老人ばかりの深刻な過疎

友達に配りて余す茄子トマトもったいないけど畑に埋める

草汁に汚れし指頭を丹念に洗ひて日々の買物に行く

野菜類の蔭に身を寄せ憩うとき汗が目にしむ炎暑の日差し

庭草を取りたる時にこの年の蟬穴少なきことも寂しき

杉の木に泣きて短き一生終へ蟬の亡骸を木の根に埋める

## 揚雲雀

豊川 安藤 和代

病む夫に奇跡よ起れ願いつも受け止め生きよ自分を叱る

父の為に付けし手すりは今夫の助けとなりて淡く光りぬ

体調の良き日の夫はにこやかに今年の菖蒲はきれいかと問う

どんな時も歌詠む事は捨てられぬペン持つ指に力こもる

青竹の伸と育つを思わせて帰省す孫に青年を見る

一センチ程の蟪蛄に手を出せばしつかり命をかまえておりぬ

牛蛙の声聞く夜半「生くるとは」考えてをり答えも出ず

窓に聞く揚雲雀にリズム合せ茗荷を刻む青葱きざむ

友の努力のしみ込んでいる玉蜀黍かめばブワツと愛があふるる

あの音色子守歌とて眠る夜を思いて初物茄子を与えり

## 地球に

蒲郡 遠藤 脩子

太々しオオスカシバの幼虫はクチナシの葉より旨い葉見付けし

ひとしきりセミの初鳴き話題なりやがて静もる今朝の我が職場

思いつきりショートカットに白髪染めわが顔の額縁梅雨明けバージョン

カレーうどんを啜る我が背を額を首を汗とめどもなし小気味好きまで

韓流のドラマが好きとふ我が友にランタン花咲くアブチロン小分ける

抜けるよふな青さの果ての宇宙を思ふこの地球ありて我が生命あり

地球上の生命これ以上奪ふことなけれ天災にても人災にても

一九四〇年この地球に生まれ生きてきた世界中の人々<sup>さき</sup>幸くあれかし

押し寄せる新聞テレビの報道に真正面から向き合へずゐる

深夜ラジオからボビー・ソロの歌若き吾がカタカナで覚えし<sup>し</sup>頬にかかる涙<sup>し</sup>

瑞瑞しく

豊橋 胃 甲 節 子

瑞瑞しく青く短かき花付きの胡瓜二本を届け下さる

登りゆく木の元切られ草刈られ定家葛の面影もなし

水撒をしても午後にはプランターの草花萎ゆる術無き暑さ

今年二度目の牟呂用水の道歩くクローバーなし草花も無し

紅白の水引草も咲き初めて痛み病みつつ日のみ過ぎゆく

最後迄きちんと其の身を整へて胸に手を組み美しかりしと

庭の木々色濃くなりて暑き日々生きる意味問ふ一人胸内

漸くに百日紅の花咲き初めぬ花に心の平安戴く

弟の死の苦しみが其のままに腰の激痛胸の激痛

今年又炎暑となりて日本地図赤にオレンヂに日毎塗らるる

## 鯛の大群

沼津 鈴木孝雄

林縁に拡がる清楚な白い花歩みを止めるトキワツユクサ

カッコウの歌声響く早朝の硫黄香漂う万座温泉

遠泳で遅れた友を励まさんとみな頑張れの大合唱

海面の一角盛り上げピチピチと待ちに待つたる鯛の大群

三尺余のシイラを上げた釣り人は金色の魚共々跳躍す

雨音を傘に聞きつつゆつくりと霞む港の散歩も風情

長旅で弱まり進む台風八号伊豆を通過も風雨気付かず

プロアマの公開囲碁を観戦す名解説に眠る暇なし

スターマイン派手さが受けて他を押し打ち上げ花火華の座譲る

実家行き伸び放題の草刈るや昔遊んだ石現れぬ

## 空如師

東京 足立晴代

吹く風の優しく肌にふれゆきて暑さ忘るる夕べなりけり  
ひたすらにボール追いゆく武士の輝く瞳頼もしくもあり  
大輪の百合香ぐわしくたゞよいて蕾咲き初む楽しみをりて  
照る陽ざし汗ばむ肌に涼風をうだる求め望みて過す日々  
宇惰留日の続きし暑さ涼もとめ冷めたきものを恋ひ望みたり  
千金の風吹きとおる涼しさに団扇忘れて過しゐるかな  
身のためと自力の行動仲々に楽しくもあり苦しくもあり  
師の歌集読みて初めて越しかたの人生模様眼をみはりけり  
外国の文化と共に日本の伝え来たりし誇れる文化  
法隆寺壁画を模して人生を捧げて画伯鈴木空如師（父母の友人）  
法隆寺壁画の復興今こゝに空如師の遺蹟燦然（NHK放映済）

## 科学と自然

大阪 伊藤 忠 男

先史より恐れ敬うこの自然いまだ知らざることばかりなり

マスコミのお蔭なりとて我が技術世に広まるは望むことなり

まだ見えぬ我行く先のその先に何があるのか分からぬが夢

暑さなぞ負けぬものかと意地はれど歳に勝てぬか息切れの夏

熱き夏汗も涙も枯れ果てる痛まし事故の何と多きや

猛暑来て豪雨突風土砂崩れ神の怒りに成す術も無しや

津波とて所詮地球の営みぞ人の叡知はこれ無限なり

久しぶり学生気分でペンを取る微分積分ガウスの定理

寝付かれぬ今宵も続く熱帯夜それとて楽し浮かぶアイデア

けたたまし蝉の鳴き声夜が明ける陽射し憎しや今日も猛暑日

守宮やもり

東京 富岡和子

この和服孫を抱いた義母フオト半世紀すぎマイドレスなり

囲む椎木したたる楓友の庭草刈りあとの露草の青

波ガラス守宮やもりの指は二十本夜目も色気は凌霄花のうぜんかつら

丁度良いビー玉様の柚子の実は気付かぬ間の梅雨明けの朝

黒雲にゲリラ雨かと急ぐ路地蟬の初なき命いとおし

時すぎて月下美人の植え換えは心配よそに大きな蕾

物干しを絡めて高く粒の房零余子むかごの花見朝な夕なに

曇みの目さやかに見えて位置かわる永遠とわにあれよと十六夜の月

大学の超今様のライブラリめぐらす花壇早や女郎花おみなえし

久びさの青山通り大暑の日イタリヤ家具で格差マックス

## 茅の輪くぐり

東京 森岡陽子

傘一つ日傘に成ったり雨傘と梅雨の合間の日差しややこし  
梅雨時の間々の夜空にいでし月動き静かに窓辺を消え行く

同級の友と並びて講義受け卒業以来五十年ぶり

この時期は元氣満ち満ちわっぱ船女船頭しわ隠せし

何故なのか自然は不思議この夏の温暖化の中あられ降り積り

面白く頬もゆるみて愉快なり相撲浮世絵肉がモリモリ

水無月の茅の輪くぐりで厄祓ふ八の字回りに我清めゐる

風薫る私の横で犬達もまどろみの時静かに過ぎ行く

揺れる葉とチイチイチイの鳴き声は小さい小さい目白二羽なり

七夕に我も会いたき人ありてベガの織姫共に願いを

夏 至

春日井 清澤 範子

西庭に物干しをれば鳥が来て赤き南天啄ばみゆけり

六月二十一日夏至なり雑用こなし最善尽す満足の日に

寝付けなき夜もまた楽しからずや吾の短歌のシンキングタイム

他人とのつながり上手に出来なくて面接に行く娘を励ます

台風の片付けしつつ裏庭を見れば百日紅一枝無事に

夫の誕生日娘は腕の見せどころ煮物を作る材料の吟味

夫の耳遠くなりたり補聴器を用意をしたし気にかけてをりて

早く目覚めて額にしわの深くある夫の寝顔を見つめゐるなり

ヘルニアの治りつつある娘なりバス停の公園桃の花最盛り

月に一度神経科の診察日なり食欲はあるかと笑顔の医師は

## 七夕月

名古屋 近藤 映子

うろうろと我家の亀はベランダに二匹連なり夕食時刻

水槽に亀餌パラパラ投げ入れて大小二匹はきそいて食べぬ

なつかしきクラスメートの贈り物豊橋産の種なしぶどう

七夕に吾の願ひを短冊に書けどむりむり願ひは願ひ

初盆のまつり準備の気になりて仏壇屋さんを娘と訪れり

パソコンのマウス動かす右手指思うにまかせずいらいらもする

体温を超したる気温の猛暑日の七月二十日を過ごしてをりぬ

仏壇のお盆飾りの準備なり白百合ホーズキ白菊リンドウ

注文の家紋入ちよちんの届けばすぐに組立ててみる

お盆には夫は本当に帰り来るか馬牛蓮葉飾りつけたり

## 母校

新城 半田うめ子

今にして思ひ出すなり米の無く平成六年草を食みたり

米の無き平成六年矢部より数人来たりて父の米をもち行く

久々に母校の門の前に立つ学校を休みし日の多かりし

学校を休みし日の多くして先生は常々やさしかりけり

若き日よ千<sup>せん</sup>ぞう坊の菓子<sup>かし</sup>き多く貰<sup>もら</sup>ひたりき思ひ出すなり

杉山の今村家にて千ぞうと言ひしのやさしき人有名なりし

庭に来て遊び居るなり数ひきの猫はからすを追ひはらうなり

井戸端の近くにありし桜の木<sup>き</sup>切りてしまひき不思議に思ふ

今朝も又見回りくるるかひとひとりこんにちわと言ひてゆきたり

## 夫が居ぬ故

蒲郡 杉浦恵美子

平日の昼間窓辺に所在なく景色見てますこんな日もてある

若き日に夫と暮らしし渥美半島横たはる見ゆ我が家の窓に

渥美半島それから豊橋三十年夫と暮らしたあの対岸に

豊橋に暮らしし日々が遠離る共に語らふ夫が居ぬ故

我が知れる夫は能弁酒飲めば山の話しにクルマの話

父母夫は居ねど夏には蝦蛄茹でて黙々殻剥き年中行事

フエイちゃんの結婚祝に贈らむと刺繡のクッション作り始める

麻布の縦横糸抜き亦かが膝る徒労のやうな刺繡しゐる

我が刺繡のクッション遙々巴里に行きその後何処に納まるだろう

フエイちゃんはマレーシアからパリに行きこの次会へるの何時のことやら

## 鷺草

豊川 平松 裕子

ベランダより見下してゐる芝庭に影通りゆく空ゆくものの  
家になれば遠き雷にも早や早やと洗濯物を取り込まむとす

球根を埋めて半年鉢ごとに鷺草の蕾ふくらみて来ぬ

亡き君の伝へしままに植ゑ替へて液肥施せし我が鷺草

二十五の蕾付きたる鷺草の太平鉢を玄関に移す

ひとりふたり鮎釣る人あり川上の川原に拾ふ緑の石を

植ゑ替へてさやかに戦ぐアブチロン窓辺に見つつ一人の朝餉

智慧尼なき正覚寺の盆施餓鬼不参加の世帯半数となる

宗派越え支へ来たりし正覚寺無住となりて存続危ふし

壊れたる電子辞書を諦めて学生時代の辞書を取り出す

## 花托

豊川 山口千恵子

ミニ蓮の花の散りたり花托には七個の種をみな持ちてゐる

暑しあつしと言ひつつ暮れし夕まぐれ稲田渡りくる風に吹かれぬつ

カレンダーに大暑と赤き文字のあり朝より蟬の姦しき声

挿芽せしダチュラの咲くはいつのこと萎れしみどり葉の鉢に水かける

炎天の休耕田に芽生えゐる大豆はみどりの畝うねとなりつつ

芽生えたる大豆は青き列をなす秋には稔らむ黄金の色に

稗多き今年のが田に入りてゆく丈高くなりし稲押し分けて

稲田に入り切り取りゆける稗の莖にジャンボタニシの赤き卵塊

金色と赤き鯉二匹ゆったりと水豊かなり音羽川の朝

自転車を椎の木橋の上に止めさざなみ立てる川面眺めぬつ

## 御衣蟬

豊川 小野可南子

見渡して亡き静誠尼の庵あたり御衣蟬の初鳴き聞こゆ

放生を常設かれ給ふ静誠さま今日は三回忌の勤まりゐます

畑草を引きゐる私の辺に寄りて静誠様の黒猫クウは

我が手足脳とのつながりままならず中の廊下をノタリノツタリ

我が辞書に熱中症は見あたらせず古くなりたり用字便覧

待ちに待ちし雨降りいだすたちまちに大き雷鳴そして落雷

ひと雨のあとの湿気は去りゆきて脳と手足のつながる思ひ

夕風のたち始めたる畑に来て夏草搔きゆくアルミの鋏に

音も無き真夏真昼の我が狭庭乾ける土に蝶の舞ふ影

くつきりとくろぐる影をうつしゆく揚羽の蝶も静かなりけり

## 大磯(1)

豊川 夏目勝弘

子規をまね思ひつきの行動の失なふ時間の効果を知りぬ

一時間待ちて今日のキップを買ふここから始まるボタンの掛け違ひ

午前六時はや通勤の満員電車二十年ぶりに楽しみてをり

都心すぎようやく空きこし車内より雲行きながめ大磯に着く

駅よりの細く長き下り坂すれ違ふたびに半身となりて

このあたりは松林なりしや子規宿りし藁屋の宿は海近き所か

坂つきし所に高き防波壁鉄扉あきぬる所を通りゆく

広びろとつづく黒き砂の浜サーファー三人海を見てゐる

寄する波かへす波をのみこみて砂地を伝ひ音響きくる

台風に雲おも重し砂の浜太き流木に休まむと寄る

## 稲妻

横浜 阿部 淑子

生い茂る櫛の幹を這う蔦は遠慮もせず  
に巻き登りゆく  
森の木は風のそよぎに歌い出し  
輪唱しながら揺れている  
特大の台風八号迫り来る「倒れないで」  
と大木仰ぎぬ  
嵐去り「頑張ったよ」と大木は言  
つてゐるよふ私を見下し  
大雷鳴放つ閃光稲妻は庭の草木を  
浮かせている

## 初夏の嵐

豊川 白井 信昭

初夏の光を背に感じつつ  
竿に干しゆく洗濯物を  
ベランダに布団干しをり  
三人分我に吹きくる初夏の風  
くつきりと本宮山の山並みの  
シルエツト映ゆこのひとときを  
玄関に茄子胡瓜の一袋置かれて  
ありぬ我が留守の間に

## 「歴代天皇御製歌」(二十八)

賈名海屋資料館

『<sup>すざく</sup>朱雀天皇』第六十一代・在位九三〇年(八歳)―九四六年(二十四歳)

朱雀天皇は、醍醐天皇の第十一皇子。醍醐天皇の崩御を受け八歳で即位された。

平将門の乱、藤原純友の乱、富士山の噴火、洪水、地震…。

紀貫之が「土佐日記」をだし、僧、空也は念佛を唱えて諸国を巡歴し、民間に念佛が盛んになった。弟村上天皇に譲位し仁和寺に入られた。歌を良くされ「朱雀天皇御集」を遺した。

独り寝にありし昔のおもほえてなほなき床をもとめつるかな

(玉葉集)

梅の花咲けるあたりをゆきすぎてむかしの人の香をば尋ねむ

(続後拾遺集)

日の光出でそふけふのしぐるるはいづれの方の山辺なるらむ

(大鏡)

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

孫ふたりポロシャツのボタンはずししま涼しき風の畦みち走りゆく

しあはせはあせらず小さく今朝もまたラジオ聞きつつ我のひととき 岩瀬 信子

断捨離とおもひつつけふの片づけに拵げし着物に重なる想い出

それぞれの慌しさが過ぎゆきて居間に残れるコーヒーの匂ひ 石田 文子

歩けなくなりて入院の日々にても母は家事をば気にしてゐたり

吾子くれしワインに我ら酔ひしれぬ一九五四年の深き味はひ 森 厚子

早き朝のムラサキツユクサ葉の先に玉露となりまるく光れり

遠く近く蛙の鳴きて梅雨の夜のほのあたたかきこの草いきれ 山崎 俊子

金色に輝ふ鳳凰仰ぎたり落慶を經し宇治平等院の

阿字池に映ゆる丹色の鳳凰堂いま吹く風にかすか揺れつつ 三田 美奈子

ジャスミンの軒端に広がり匂ひ満つ洗たく物干す我もその中  
なぜ父の手を握らずに逝かせしか今なほ悔いて遺影の前に

水野 絹子

空に高く伸びたる枇杷の枝の先今日も来てをりいつもの鳶が  
苗植ゑむとどしゃぶりの雨に止むを待つわれと娘はこの小屋の軒

牧原 規恵

大皿に赤きトマトを山盛に今年の夏も乗り切らんとす  
車窓より見ゆる青田の続く道近づきにつつ孫の居る家

稲吉 友江

葉緑の柿の木下に風そよぐ実家の庭に吹かれてひとり

この朝もガラスポットに湯を注ぐ茶葉は静かにジャンピングする

鈴木美耶子

子規庵に訪れし日憶ふ淡紅の秋海棠の花わが庭にも咲き  
再々に息子家族のこの家に団欒のときを過ぎしつゝ

吉見 幸子

今朝もまた夢に目覚めし朝明けにいつものパイクの音通り過ぐ  
路上にて何啄むか背を向けてそしてとんびは飛び立ちゆけり

牧原 正枝

『俳句』

存在の軽き重さやけむりの木

植村公女

山梔子や夜の公園横切りし

夕映えのまつすぐ届き時計草

屋久島の山を二分す瀑布かな

柳田皓一

ひまわりの大輪ひとつ空にあり

春蝉や頭上の松の深きより

文字涼し心嬉しき便りかな

小柳千美子

夕暮れて葉擦れに和する蝉の声

いつまでも母が手を振る挽夏かな

騒音に目白の姿聞けぬ声

森岡陽子

遠雷に早む夕餉の仕席かな

奥多摩のクレソンの葉菜山清水

伐採と聞きて名残の梅の郷

龍からむ塔の相輪散る桜

しやきしやきと鱧切る音や方櫛

小池清司

帰省子の四角な空を仰ぐなり

微睡めば産院の夜の明易し

堰五尺光となりて鮎躍る

庭下駄の仕舞ひ忘れて戻り梅雨

## 私の一首

豊作を喜ぶ農夫の声聞こえ心ほっこりひと日を過す

安藤和代

自宅の前の道を農家の御人が二人通っていく。聞くともなく耳に入ってきた会話、「今年の米はよかったのん」「天候が不順で心配したけど上出来だ」「長生きはするもんだアハハハ」。年齢から言って私と同年代であろうか。元気な笑い声が青い空に吸い込まれる様に響いていた。遠のく軽い足どりが喜びを語っていた。喜びの声は他人の心まで豊かにする。わずか数分の出来事ではあったが私はほんわかと幸せな気分で一日を過した。

戴きたる尾道のお土産嬉しくて椿の花持ちお礼に伺ふ

胃甲節子

私が十年来、何処にも行く事が出来ませんので、お隣の奥様が、何かと気遣って下さり、一寸の留守の間に、玄関の新聞受けに、珍しい尾道の、お土産が、何種類か入っており、これはお隣の奥様に違いないと、早速裏庭の椿の花を、切り取って、お礼に伺うと、奥様の方が恐縮されて、いろいろと、珍らしく、楽しかった、お話をして下さい、しばし私も心とんで、幸せな思いに浸り、お礼と感謝の、ひと時を、過ごす事が出来ました。

# 朝の日に輝き放つシーグラス少女千尋と砂浜を行く

小野可南子

平成二十六年五月号の一首

春休みの一日孫の千尋の希望に寄り添い、砂浜を歩きました。

読んだ本の中に、シーグラスの輝きは夢をかなえてくれるという一節に、ロマンチックな思いを抱き、シーグラスを探したいと言う千尋の後に続いて赤・青・緑等々を拾いつつ割れたガラスが海の波にさらされて円かに宝石のように砂浜にキラメクのです。中学生になる千尋と楽しい一ときでした。

# 朝目覚め小鳥の声をききながら床の中にてしばし憩ひぬ

清澤 範子

平成二十五年四月号より

毎日目覚める頃は、小鳥のさえずりが盛んに聞こえる。床の中で今日も一日が始まる。脊柱管狭窄症を手術した夫、ヘルニアの病に見回れながら頑張る娘。私は専業主婦にして毎日新聞に入る広告紙を見ながら、献立に気を配る。今日も一日元気に最善を尽して、頑張ろうなどなどしばしの間思いに更ける一時なのです。胥もなく孫もなくして三人の暮し、淋しさもあります。が気楽さもあります。それを大切に生きぬこうと思う今頃です。

## 街中の公園の隅ひそやかに花返り咲くも気づく人無し

佐藤喜仙

都内には児童公園等小さな公園があり、簡単な遊具と砂場があるのが一般的である。その空間と隣接する人家との間に一メートルほどの緩衝帯が作られ、小木や草花が植えられている。特につつじは公害にも強く、初夏には鮮やかな花をつけるので人気がある。そのつつじであるが、桜や山吹と同様、初冬の暖かい日の中で花を咲かすことがある。これが返り花であるが、冬の花はひっそりと咲き人に気付かれぬうちにしほむことが多い。

## 自筆遺言筆の字二画抜けて居りその期の夫の心根哀れ

杉浦恵美子

最後の入院となった平成二十二年の晩秋のある日、夫から便箋と封筒を病室に持って来るように頼まれました。翌日「遺言書」と表書きし「家裁豊橋支部へ」と態々鉛筆でメモ書きした封書を渡されました。没後家裁で検認した時初めて中身を見たわけです。簡潔にして要を得てあり、彼らしく冷静だと感じました。ところが「自筆遺言」の筆の字の二画が抜けているのを発見し、胸を衝かれました。書いた時の夫の気持ちを思うと今も心が乱れます。

つり下がるキュウリ手に取り収穫す刺の痛さは菜園妙味

鈴木孝雄

平成十一年から沼津各地の貸し農園を転々としていたが、三年前住まい近くの放置宅地約七十坪を購入し自前の畑にした。土地は堀り起こし水道と物置を付け、今や自慢の菜園になっている。無農薬有機栽培を頑なに守っているためキュウリはスーパーで売られているように見かけは良くないが、味は濃い。左手で実をもって右手のハサミでそつと切り取る時、指に刺が心地良い。まさに昔のキュウリ。太陽の恵みに感謝しつつ詠んだ。

口数の少ない小女が花に触れきれいと云えり笑えみてうなづく

内藤志げ

姉妹でよく犬の散歩にわが家の門の道を通る少女。犬の糞の始末を私が誉めてから姉さんとよく言葉を交す様になった。

今日は妹さんが一人お習字の帰りか門の冬の向日葵に手を触れているそれを私も暫く眺めていた。目が逢いきれいと云い合い微笑む。学校帰りの童子が時々寄り道しながら門の道を通る、なるべく声掛けをする。子供は大切な宝と思う。

## ある自然科学者の手記 (28) 大橋望彦

## 『顕微の世界』①

小学3年生の頃だと記憶しております。父が夏休みに使える様にと、一つの荷物を差し出した。その荷物は二つの箱でした。多分その時の親父は、息子がどんな顔をするのかが楽しみであったでしょう。中に何が入っているのか何も言わずにニコニコしております。急いで包みを開けてビックリ致しました。何と立派な顕微鏡が出て参りました。その頃(昭和15年頃)では、顕微鏡は、学校の理科準備室の戸棚の中に、大きなガラス鐘の中に大事に仕舞ってあるのが普通でしたので、小学生が顕微鏡に触れるなどは夢のような話であったのです。ですからその驚きは言語を絶するほどでありました。出てきた取扱説明書等は難しく、理解する事が出来ない状態でありました。父はこのような息子を観ることを多分子想をしていたのでしょうか。凶に当たった息子のリアクションに満足したのであります。落ち着いた態度で『これは顕微鏡で、普段我々の観ているものも、これで観ることで、別の世界が在る事が判るのだよ』と、前置きをして、荷を解き始めました。初心者向けの比較的簡単な顕微鏡とはいえず、鏡筒に接眼レンズ(5倍、10倍)が付き、対物レンズ(レボルバーと言う2倍、10倍、20倍の対物レンズが複数個、装着

出来、適宜回転してレンズ交換が簡単に出来る装置)も付いている。顕微鏡の倍率とは、此の接眼レンズの倍率と、対物レンズの倍率とを掛け合わせた数が、実際の観えている物の倍率となるのです。流石に、反射光源は、普通の丸い鏡と、裏面には凹面鏡が着いている簡単なものであった。鏡台には留め金があり、其れでスライド・ガラスと言う薄い(1mm位の厚さ)長方形のガラス板(2.5cm×7cm位)が装着出来、其のガラス板上に、これから観るものを載せ、其の上に2cm四角位のもっと薄いガラスのデッキ・ガラスを載せて、準備完了である。『さあ、覗いてご覧。』と父が促した。先ず覗きながら、焦点調節ノブと言う回転レバーを、ゆっくりと静かに手前へ廻すと、何と、鏡筒の上の部分が静かに上がるのである。覗いていた、ぼんやりしていた物が急にハッキリと観える様になった。ノブを更に廻すと、亦ぼんやりとしてしまった。元に廻し戻すと再び先のものがハッキリと浮かび出るのである。是が焦点を合わせる操作である。『凄い!何、是れ?!』と思わず叫んだ。『蝶の鱗粉だよ。』父は一寸得意げな顔付きだった。『あんな粉みたいなのが、こんなに綺麗な形をしていて、夫々に色が違うことも判るだろう?』『此の様な物が沢山集まって蝶々の羽に付いているから、蝶の種類で色々な模様の特徴が出来て来るのが判るだろう?』こんなに丁寧に父が説明して呉れた事もビックリした。父親って、何か怖い威厳のある存在であったのが、此処ではそうでは無かった。学校の先生の様でもあるが、其れでもなく、本当に

頼りの在る、何でも聴けば判っている人の様にも感じた。何だかとても嬉しくて、仕方が無かった。『じゃあ、蛾の鱗粉もそうなの？』と質問した。『観てご覧、違いが判ると思うよ』と、撥ね付けられた。そう謂う疑問を誘導するのが父の目的の様であったのだ（蛾の鱗粉は在りますが、所々に鋭い棘みために尖がった所が在ったりして、其れが痛いこともあるのです）。小学生にはそんな事は判らなかつた。其れでも確かに、次には何を見ようかを色々考え出した事は事実である。

もう一つの包みを父は開き、『是は、一寸変わった物なので、説明書を読みながらやって見よう。』と謂うのです。其れは、「スンプ・セット」と謂う物で、粘度の高い、透明の液に指先を載せ、その指紋を拡大するような原理の様です。其の指紋を顕微鏡で見ると、まるで想像もしなかつた細かい皺の様が浮かび出ているでは有りませんか。父の指紋の様とは明らかに違つて見えます。現在行われている指紋鑑定の方法とは大分異なつてはいますが、観ているものは、大変近い物であります。其処で亦、『キリギリスの脚に指紋つてあるの？』と、聴きましたらば、『観てご覧。』と撥ねられました（キリギリスの脚には指紋が有りません）。その他、玉ねぎの薄い皮の部分を開じ込めた、スライド・グラス等が、教材用に入つていたので、其れも見ましたが、是も魯威の光景でした。生の細胞の形を観たのは是が初めてであります。『玉ねぎもヒトも同じ細胞なの。』と聞きたかつたのですが、返事はもう判つており、止めました（正確に言つと、植物の

細胞には表面を、細胞膜と謂う硬い膜が覆つていますが、動物の細胞にはその様な膜は在りません。然し、細胞と細胞の境となる所には、原形質膜と謂う薄い膜で仕切られて居ります。其れからと謂うもの、宿題が山の様に溜まつてしまつた感じですよ。其れでも、こんな沢山の宿題でも、全然苦にならず楽しいものでした。疑問に思えば、先ず、自分で解決してみると謂う、無言の父の策略でもあつたのでしよう。夏休みが終わる頃には、沢山の製作した顕微標本がラベルが貼られて箱の中にぎつしりと詰まりました。此の箱も菓子箱に、ダンボールの凸凹の片側をむき出して、スライド・グラスに合わせて向かい合わせ、きちんと整理して収納できるものを自作しましたが、父が其れを見て、大変良く出来たが、重くなると壊れそうだから、木の標本箱を買つてあげようと整えてくれました。是で夏休みの宿題は完璧でした。でも、学校では余り観ることが出来ないの、何が出来ているかは、余り理解されずに終わりました。

是が、私の『顕微の世界』に首を突つ込んだ最初の機会であつたのです。まさか此の時は、自分自身が、顕微鏡を横に置く職業に成るとは、夢にも思えぬ事でした。生来私は、B型と良く言われ、何でもノンビリとして、大雑把な所が在る様なのですが、顕微の世界を探索するような、繊細な仕事を等とは、思いも掛けなかつたのです。

## 絹の話 (46)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 絹糸の太さ

#### 【絹糸の構造】

通常私達が絹と言っている糸の事を専門的にはフィブロインといいます。蚕は2本のフィブロインを吐糸するのですが、セリシンと云う蛋白質が吐糸の潤滑剤として働きながら1本にまとめて吐くのです。その構成比率は繭の種類によって多少の違いがありますが、フィブロイン75〜80%、セリシン25〜20%です。その太さは約20/1000mmです。1本のフィブロインは10000本以上のフィブリルから成り、このフィブリルは900本以上のミクロフィブリル分子から出来ていて、ミクロフィブリルは350本以上のフィブロイン分子から出来ています。このフィブロイン分子は4000個のアミノ酸が数珠つなぎになった物です。一般的に絹糸とはセリシンを落とした物で、沢山のフィブリルの集束した物です。結晶領域を主にグリシン、アラニン、セリンが結合していて、非結晶領域に主にアスパラギン酸、グルタミン酸、バリオン、アルギニン等が結合しています。

#### 【古来の絹糸の太さ表記】

絹糸の太さについて初めて記されたものは、後漢の初めに編纂された『説文解字』の注釈ではないでしょうか。そこには1個の繭から出る1本の糸を「忽(こつ)、5個の繭糸をより合わせ揚げた物を「糸」、糸を2本より合わせた物を「絲」、10糸を合わせて毫(もう)、10毫を厘(りん)と記しています。

最近ではすっかり使われなくなりましたが、以前はよく「1厘の値打ちもない！」などと言う言葉が会話の中によく出て来ましたが、こんな所に語源があったとは面白くありませんか。

#### 【今日の絹糸の太さ表記】

糸の太さには大きく分けて2通り有ります。棉や毛の様に短い繊維に撚りをかけて作られる物は「番手」と云う単位を使いますが、絹や化学繊維の様な長繊維の物には「デニール(D)」を使います。

9000mの長さの糸が1gのものを1デニールと言います。昔の繭と品種改良された今日の繭では大きさがかなり違いますので糸の太さも異なりますが、2〜3デ

ニール位です。今日一般的な3Dの繭を7個とか9個を一緒に揚げますと、よく着物屋さんの話に登場する、21とか27デニールの糸が出来ます。ところが繭は大きさによって糸の太さが異なりますので、糸を揚げるには繭の大きさを揃えなければなりません。それでも糸の太さに多少の個体差があります。昨今の繭は1粒で1500m位糸をひきますが、人の目には同じ様に見えても、吐かれる糸は始めが太くて次第に細くなるので、何本かひき揃えても完全な均一糸にはなりません。そこで平均してと云う意味で、絹糸の太さを21中とか27中と表現しております。但し化学繊維はノズルから均一に吹き出されますので中と云う表記はありません。女性のはくストッキングの表示に8デニールとか12デニールと記されていますので、購入の目安にしている方も大勢いらつしやると思います。

今日使われている繭では小石丸（皇后陛下が養蚕されている）、新小石丸（約2.5D）と云う品種は繭が小さく糸も細く、古代の繭の大きさに近いので、古物の修復等に使われています。重ねた色が美しく映え、軽く裾さばきも良いのです。

日本の近代化に大きな力を示した絹生産は糸の規格を

統一する事によって一躍世界制覇を成し遂げました。明治5年に出来たフランス式富岡製糸所は、日本各地から伝習性を受け入れ、絹糸の近代製法と規格化に取り組んだのです。

### 【規格化できない野蚕糸】

現在世界で一般に流通している野蚕糸は何万種類もある中のほんの数種類です。例えばマダガスカルに棲息する美しい銀色をした大型のアゲマミトレイの糸は1本で100デニール前後もあり、太くて繊維には向きません、また日本のウスタビの繭はどうしても解舒出来ません。野蚕は家蚕ほど家畜化的改良をされて来ていませんので、繭の色も大きさもその年毎に個体差が出来ますし、家蚕の様に機械的糸揚げが出来ませんので、人の手作業に頼る事になります。したがって糸の太さは様々で、規格化して糸の太さを統一する事は大変難しく、今後の大きな課題です。それには先ず、品種の管理をしなければなりません。戸外下の飼育に頼る今日、人為ではどうしようも有りません。野蚕絹は人の手と自然が作る一期一会の授かり物なのでしよう。

## 物理学者と詩歌の世界 (56)

一石

### エドワード・ウィッテン

エドワード・ウィッテン (Edward Witten, 1951-) は米国メリーランド州生まれの米国の物理学者。現代における最高峰の理論物理学者の一人で、極微の世界の素粒子論と、宇宙の構造を表す一般相対性理論の統一を目指す「超弦理論 (スーパーstring理論、超ひも理論ともいわれる)」の旗手として活躍している。現在はプリンストン高等研究所教授。

父親ルイス・ウィッテンは一般相対性理論の研究者でシンシナティ大学教授であった。当初エドワードはジャーナリストを志望し、ブランダイス大学時代は歴史学や言語学を専攻。左派系の「ネイション」、「ニュー・リパブリック」といった雑誌に寄稿したり、1972年の大統領選で大敗したジョージ・マクガヴァンの選挙運動に携わることが挫折。ウィスコンシン大学大学院で経済学を学ぶがすぐにやめ、1973年にプリンストン大学大学院で応用数学を専攻、後に物理学に移り、デビッド・グロス (参考資料1) の下で1976年に博士号を取得。その後ハーバード大学のフェローなどを経て、1980年から1987年までプリンストン大学物理学科の教授

を務めた。1995年に開催されたスーパーstring理論の国際会議で、「M理論」を発表し学会に衝撃を与える (注1)。ウィッテンの研究は物理学のみならず現代数学にも多大な影響を与えており、1990年には物理学者として初めて、数学界のノーベル賞と言われるフィールズ賞を受賞 (参考資料2)。

21世紀における物理学の最重要課題の1つの超弦理論は、ジョン・シュワルツらによる「第一次string革命」を経て発展したことは参考資料3で紹介した。1995年、ウィッテンによつてM理論が提唱され「第二次string革命」が引き起こされることになる。そのためジョン・シュワルツと並んでウィッテンは「string理論の父」ともいわれる。

数多くある業績の主なものを列挙する。1) サイバーグ・ウィッテン理論、2) グロモフ・ウィッテン不変量、3) 超対称性とモース理論、4) 位相的場の理論、5) 結び目のジョーンズ多項式における場の理論との関係、6) WDVV方程式、7) ウィッテン予想。フィールズ賞 (1990) 以外の主な受賞に、ディラック賞 (1985)、アインシュタイン・メダル (1985)、ハイネマン賞 (1998)、アメリカ国家科学賞 (2002)、ローレンツ・メダル (2010)、京都賞 (2014) など多数。京都賞の受賞理由は、「超弦理論の推進による数理学の新しい発展への多大な貢献」。

以下にウイッテンに関するエピソードを挙げる。

1) 数学者たちは「ウイッテンは物理の片手間に数学を  
していた人だ、彼には数学で適わん」と嘆いている  
とか。ウイッテン本人は「超弦理論の数学は何故か  
22世紀の数学が20世紀に間違つて出てきたもの。私  
は22世紀の数学で頑張るが、君たちは21世紀の数学  
である場の理論をやりなさい」と言っているとか。  
多分に誇張された噂話ではあるが、ウイッテンの天  
才ぶりが伺える。

2) ウイッテンは2003年に京都で開催された国際会  
議に出席のために来日した。その頃のネット上での  
書き込みをいくつか。「ウイッテンは実証できない  
研究ばかりだからノーベル賞はもらえないけど、彼  
の肩書きはノーベル賞以上だ」、「ウイッテンは学部  
時代に文系を専攻し、後に理転。この物理学者はま  
るでルネッサンス期の天才レオナルド・ダ・ヴィン  
チを見るようだ」、「ウイッテンは大天才なのに、も  
のすごく腰の低い人らしい。一説によると、他人に  
妬まれるのを回避するためとか」(参考資料4)

3) 数学者の藤原正彦氏がウイッテンと対談した時の会  
話。藤「あなたの理論が正しいと、実験や観測で確  
認されるのはいつ頃になるとお考えですか?」、「ウ  
500年たっても無理かも知れません」、藤「その

ような理論をあなたが正しいと信じる根拠は何です  
か?」、ウ「美しいからです。あれほど数学的に美し  
い理論が正しくないはずがないと信じるからです」。

注1「『第一次ストリング革命』を経た超弦理論には、  
ひとつの大きな問題があつた。それは、いろいろな人が  
研究した結果、5つのバージョンができていたことであ  
る。統一理論として説明するには、いくら何でもこれは  
多すぎる。1995年の国際会議でウイッテンはこの難  
問に終止符を打った。実は、同じものを5通りの方法で  
見ていたというのである。これには、M理論という名前  
がつけられた。それまで、超弦は10次元で働くと思われ  
ていた。時間の1次元、空間の3次元と巻き上げられ  
いた6次元であつたが、彼はそれにもう1次元を加えて、  
11次元とした。この場合、次元はすべて、動ける可能性  
のことをいう。このM理論の登場により超弦理論は次の  
発展段階に入るのである。

#### 参考資料

- 1) 三河アララギ、P42、第61巻、第7号(2014)
- 2) Wikipedia, the free encyclopedia: Edward Witten
- 3) 三河アララギ、P42、第61巻、第8号(2014)
- 4) <http://www.kyoto-u.com/lounge/riyokiyaku.htm/>

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

### 十八 土屋文明<sup>1</sup>

明治四十二年、伊藤左千夫をたよって上京してまもなく、茂吉、千樫、赤彦、純、憲吉らとともに「アララギ」に創刊号から参加した土屋文明が茂吉のことを詠んだのは次の三首が最初である。

帽子ぬぎ汗ふるひ居るわが友のゆるきズボンに疲労  
はしるき  
うれひつつ歩みつとむる人の後にわが祈事ねごとの小さかりけり  
言にいでて云ふすべもなき心には共に山水ほめ給ふ  
らし  
大正十五年『往還集』

題詞に「大雲取越舟見峠」とあり、文明年譜に「大正十四年七月、第二回比叡山アララギ安居会出席。会後、……斎藤茂吉、武藤善友と共に熊野に遊ぶ」とある。一首目は「汗ふるひ居る」ほどの汗かきであることから考えて「わが友」は茂吉であろう。二首目は、前年に全焼した青山脳病院再建のために茂吉が苦しんでいることを

念頭に詠んでいる。

雲取をこえしは十年あまりすぎぬまたあらめやも今  
日の此の日も  
昭和十一年『六月風』

二回目の茂吉との雲取越え（昭和九年）に際して、十年前のことを懐かしむ歌である。「またあらめやも」の反語に思いの強さが表れている。茂吉もまた十年前のことを「大雲取小雲取こえまあり来しその夏の日をおもはざらめや」「この宮に額づきわれの居りたりしことを思へば十年を経たり」（昭和九年『白桃』）と偲んでいる。茂吉との最初の雲取越えから三十六年後にも文明はその日のことを偲んでいる。

大峰の道に見しも君と共なりき今日松風草の花の時  
にあふ  
草の中に石を求めて道を知る三人踏みし日の記憶お  
ぼろに  
何を願ひ雲取越ゆと企てしすぎて思へばただただ空  
し  
昭和三十六年『続青南集』

題に「大雲取舟見峠」とある一連中の三首。峠への道に松風草の花を見たこと、夏草に覆われた道を探すのに昔の人の敷いた石をたよりにしたこと、自分は小さな「祈

事」を持っていたことなどを、久々に訪ねた峠で思い出しているのである。

大雲取越えて苦しみを残す二人定家四十歳茂吉

四十四

寒き雨に咳きつつ越えし定家知らず汗たらす茂吉は

我が目に見たり

同右

前と同じ一連中の歌。建仁元年（一一〇一）、熊野三山を参拝する後鳥羽院に随行したときの藤原定家の苦しみ、大正十四年四十四歳の茂吉が汗に苦しんだことを詠む。茂吉も「いにしへのすめらみことも中辺路を越えたまひたりのこる真清水」昭和九年『白桃』と詠んでいる。定家は道中の険しさを『明月記』に記しているが、越えた道は明らかではないともいう。

職はなれし我と災の後の君心あひて古き道を越えに

き

生きてゐる君と我共に行かしきを北蝦夷遠し武藤善

友

同右

前と同じ一連中の歌。一首目の茂吉の災難はすでに述べたが、前日までの安居会において茂吉は「わが受けし火難ののちの悲しみをこの夏山にやらはむとする」（大

正十四年『ともしび』と詠んでいる。「職はなれし」は、諏訪高等女学校長を経て松本女学校長の職にあった文明が木曾中学校への降格を命ぜられたとき退職、上京したことを指す。

三十六年すぎし記憶はたしかならずみちびくはただ

一並びの石

同右

同じ一連中の最後の歌。三十六年まえの三人での雲取越えの、今ではあいまいになってしまった記憶を導いてくれるのは、夏草の中をみちびいてくれたあの石の思い出だというのである。

文明には茂吉を詠んだ歌は決して多くはないが、この雲取越えのことを偲ぶ歌の多さは特に目を引く。

茂吉は「汗かき」の自分を雲取越えでこう詠んでいる。

・紀伊のくに大雲取の峰ごえに一足ごとにわが汗はおつ  
・やま越えむねがひをもちてとめどなく汗はしたたる我が額より

・かがなべし旅といはなくに紀の国のさびしき山に汗をおとせり

・暗谷にありし泉にかがまりて汗にぬれたる眼鏡をあらふ

・夏ふけし大雲取を越えながら手拭の汗幾しほりしつ  
・山のうへに滴る汗はうつつ世に苦しみ生きむわが額より

## 楽しい時間 22

山本紀久雄

2014年7月31日

世界経済フォーラムの調査によると、経済や政治などの分野について、男女平等の度合いを指数化した調査で、アイスランドが5年連続一位を確保したと大きく報道された。因みに、日本の順位は調査対象136カ国のうち105位だが、ここで首をひねった。

アイスランドは2008年に国家経済破綻したはず。国家破綻した翌年の2009年から男女平等度合い指数が世界一になって5年も続いている。どうしてか。国家破綻した場合、通常ならば混乱が数年は続くだろう。不思議だ。この疑問を解くには現地に行くしかない。

早速、訪問してみた。といっても訪れたのは2013年の夏。結論は「アイスランドは先祖返り」したのだということが分かったが、この経緯を述べだすと、今月の掲載だけでは終わらない。疑問を解決するのも「楽しい時間」であり、今月と来月、お付き合い願いたい。

1980年代中頃までのアイスランド経済は、タラ以外はほとんど展開していなかった。それが世紀末には国際金融における主要プレイヤーへと変貌を遂げ、GDPの10倍あまりに値する国際バンキング帝国を築いた。人口32万人の小さな国が、グローバル・エコノミーの偉大なサクセス・ストーリーのひとつとなり、GDP一人当たりでも世界一になろうとしていた。しかし、そのすべてが2008年に崩壊し、以前と

同じ国状態に戻ったのだが、これを語るには24年前から始めないといけないだろう。

アイスランドを初めて訪れたのは今から24年前の1990年3月。まだ、雪と氷で地面は閉ざされていた寒い時期であった。

この当時、私は日仏合弁企業の社長であって、頻繁にフランスへ出張していた。合弁企業は幸いに業績よく、利益も十分出ていたので、その帰りに関心のある世界各地を訪ねていた。

その中で興味を持ったひとつがアイスランドである。1985年と88年のミス・ワールド美人コンテストで、アイスランド女性がチャンピオンに輝いたことに関心を強くした。2013年現在、世界で最もミス・ワールドチャンピオンを輩出しているのはベネズエラの6人、続いて5人のインド、4人のイギリス、そして3人のアイスランドと続く。

つまり、世界的な美人国であるから、さぞかし街中に美人が溢れていると想定し、極寒の首都レイキャビクに向かったのである。

当時のフライトメモを見ると、パリ・シャルル・ド・ゴール空港からルクセンブルクを経由し、アイスランド航空でレイキャビクのケプラヴィーク空港に入っている。時刻は午後15時45分。既に暗い。目についたのは周辺を取り囲む溶岩であった。

タクシーでホリデイ・インホテルに向かい、案内された部屋の廊下に行ってビックリした。若い美女集団がいるではないか。こんなに早く美人に会えるとは。それもすらすらとして美人コンテストに出てもおかしくないレベルの一团に。

彼女たちの間をかき分けドアを開けたボーイが「今日は

ファッションショーですので、モデルが廊下で待機しているのです」と解説受けるまで、アイスランドではこんなに美人が多いのかと、さすがは違うと眼を丸くしたことを鮮明に覚えていてる。

ホリデイ・インホテルに二泊し、支払いは19、171クローナ、50、300円であった。換算すると1クローナ＝2.62円。2014年7月4日の為替レートは0.90円であるから、円が2.9倍上がっている。今のレートならホテル支払いは17、253円で済む

翌朝、ガイドがフロントに来てくれた。日本女性のA子さん。この当時、日本人はアイスランドに10数人程度しかなく、日本からは漁業関係者しか訪れていなかった。

A子さんは東京・池袋の病院で看護師をしていたと語り、アイスランドに来たのは、当時の勤務がきつく、身体が変調をきたしたので、静かなところに旅しようとふらつとアイスランドに来て、その素晴らしさの虜になった。その魅力とは

- ① まず治安が良い。
- ② 水と空気がきれい。水道水はそのまま飲める。
- ③ お湯は全て温泉水であって無料で提供。
- ④ 人柄がよく、体裁がらない。
- ⑤ 子どもが育てやすい。育児休暇が充実している。産後三か月は母が休み、次の三か月は父が休み、その次の三か月にも母が休みをとれる。

ということ、ここで永住しようとアイスランド人と結婚したと言ふ。

今は子供も生まれ、ここでの生活に満足している。あの東京で神経と体を酷使した生活には戻りたくない。ここが一番

だと強調し、私の顔を見つめて「可哀想だなあ」というような目つきをしたことも鮮明に覚えていてる。

いずれにしても彼女が案内してくれたアイスランドの景観は素晴らしかった。アイスランド語で「黄金の滝」を意味するゲトルフォスの滝（写真）。間欠泉・ストロツクル。シンクヴェトリル国立公園の2つの大陸プレート引つ張り合いによってできた裂け目「ギャウ」。世界最大の屋外温泉施設・ブルーラグーン。

ところが2008年10月、この素晴らしい自然景観に囲まれた平和



な国が経済破綻したというニュースが世界に流れた。この情報に接し、最初に思ったのはA子さんがどうしているかということだった。そのことも気になって、アイスランドの水産会社を訪ねる機会に、2013年7月ロンドンからアイスランド航空でレイキャビクに入った。到着したのは23時10分。深夜なのですぐに50km先のホテルにタクシーで向かった。

翌朝、通訳女性が来てくれた。早速、気になっていたA子さんがどうしているかについて尋ねると「元気ですが、経済破綻の時に離婚しました」との回答。離婚の理由について尋ねなかったが、その後の通訳からお聞きしたアイスランド人の生活変化から推察はつく。

今回通訳してくれた女性もA子さんと同じく経済破綻の被害を受けている。次月に続く。

## 『酔いの徒然』（二十九）

丸山 酔宵子

### 『シャルトルーズ修道院のリキュール』

神田神保町岩波ホール「大いなる沈黙へ」のロードショウは当日券を求めて長蛇の列。

フランスアルプス山脈の麓に建つグランド・シャルトルーズ修道院はカトリック教会でも最も厳しい戒律のカルトジオ会。修道士たちは、毎日を祈りにささげ、一生を清貧のうちに俗世間から完全に隔絶された孤独の中で何世紀にも渡って生活してきたのである。

これまで内部が明かされたことは無く、ベールに包まれていたが、ドイツ人監督フィリップ・グレーニングが1984年に撮影を申し込んでから、何と16年後に撮影許可が下りたのである。しかし、厳しい条件が付けられ、礼拝でのグレゴリアン聖歌以外の音楽、ナレーション、照明も許されず、監督一人カメラを抱えて6ヶ月を修道

士とともに暮らした。そして5年後、完成した2時間49分にも渡る感動と深遠なドキュメンタリー映画は世界で反響を呼び、ようやく日本での公開となったのである。

雪に覆われた修道院の厳しい冬。降りしきる雪、聖堂の聖櫃の赤い小さな明かり、繰り返される祈りと務め、修道士たちの澄んだまなざし。列王記19章の聖句がスクリーンに表示され「地震の後に火が起こった。しかし火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かなささやく声が聞こえた」。

「一切を退け私に従わぬものは弟子にはなれぬ」。「主よあなたは私を誘惑し、私は身を委ねました」と神と対話し、神に惹きつけられてる姿が画面に映し出されるのである。

そして厳しい冬から春へ。青い空、流れる雲。草花が甦り、可憐なハーブたちが色とりどりの花を咲かせ、小鳥や蝶達がその上を飛び交う。シャルトルーズ修道院は全て自給自足、農業、酪農も大切な勤めの一つであるが、実は、18世紀ごろからカルトジオ会に伝えられた薬草系

エリクサー（不老不死）の一種であるシャルトルーズ・リキユールでも有名である。映像には一切出てこないが、1970年以降は民間企業で製造されるようになってきたが、その詳細な製造法は、現在でもシャルトルーズ修道院の修道士3人のみを知る秘伝となっているそうだ。ブランドーをベースとして、修道院近くで採れるクローブ、コリアンダーなど130種類のハーブを加え、5回の浸漬と4回の蒸留を経て調製される。ヴェール（緑・アルコール度数55度）、ジョーヌ（黄・アルコール度数40度）の2種類があり、ストレートでもよし、カクテルでもよし。「リキユールの女王」とも称される。

世界的に有名なカクテルのアラスカ (Alaska) は、ジンベースに、シャルトルーズを入れシエークしたシヨット・カクテル。アラスカは1920年、ロンドンのサヴォイ・ホテルのチーフ・バーテンダーだったハリー・クラドックが考案したアルコール度数の高いカクテルとして有名である。シャルトルーズ・ジョーヌ（黄）の代わりにシャルトルーズ・ヴェール（緑）を使用した

場合は『グリーン・アラスカ』と呼ばれ更にアルコール度数が高い。

シャンパンの開発者ドン・ペリニヨン修道士もそうだが、高邁な僧侶は、罪深い吞兵衛である我々に対し、「百薬の長」を示し、救いの手を差し伸べているのであろうか……。

#### 夕（ゆ） 立ち避けアラスカ一杯

シヨットバー

酔宵子

## 大磯(1)

## 夏目勝弘

七月八日大宮に用あり、午後九時に会を終えさいたま新都心駅の近くのビジネスホテルに入る。

すぐさまテレビで台風八号の情報を確認、明日予定していた。大磯行きを決める。

子規を真似思いたったときに決めるとしていたため、キツプは買っていない。

ジパングは、午前六時からの窓口、大宮駅に行く。みどりの窓口の前には五時半だというのにもう二十名余の列が出来ていた。

大磯そして小田原からの新幹線のキツプを手にしたのは六時を回っていた。

大宮に入って来た電車(十五両)は満員のため、七分後の電車にと、その電車も満員もう後はずっと混むと思い乗り込む。

二十年ぶりに通勤電車の感覚を思い出しつつ揺られ新宿、渋谷と少しづつ空気ができ恵比須を過ぎ、立って居る人は少なくなる。

時間に関係のない旅人として乗っている気楽な小旅行、なにげなく車内を見ていて気付いたのは、女性の服装はほとんど異なり、男性は皆同じ。

顔も女性はスキもなく化粧を、生きいきとしている。男は力のない疲れた顔つきで吊り皮に体を預け、ときどき欠伸をかみ殺している。

スマホを持っていることのみが同じ。大船あたりでは雨は降っていない。大磯で下車。

白濁の雲が高く大磯を覆っている。案内板で確かめ、駅より下り坂となっている。たぶん海まで続くであろう。

狭い歩道行く駅に向う人と擦れ違うたびに体を半転させな

がら、長い細い坂を下る。

子規の見た松林はここら当りであろう、そして宿とした藁屋の松林館も、ここらにあつたであろう想像をふくらませる。坂もだいたい傾りかになり横断歩道となる、人型の赤色がハッキリと見える前で、しばし子規に思いを運らせていた。

信号が変わり防波壁の開口部を通ればもう大磯の砂浜が黒ぐろと広がっていた。

台風により荒れる海、砂浜にはサーファーが三人、視界の悪い海には、荒れる波間に三つの人影が波間に見え隠れするのみ。

広びろと続く砂浜には土鳩の群れ、鳥が二羽忙しげに動き回っていた。

砂浜の少し小高くなっている所に太い白い流木が見え腰を掛けようと砂を足をとられつつ向う。

浜に居た三人のサーファーが黄色の板を抱え海に入ってしまった。浜には監視員が双眼鏡で海の方を見ていた。

流木に掛けていると寄せてくる波の響きが足に伝わってくる。視界の狭い暗い海を見つめ、次ぎつぎに浮び消えてゆく思いを楽しんでいた。

年譜より「大磯」関係を記しておく

十月三日訪陸氏。新橋乗車。宿大磯松林館。

○肌寒やぶじをまきこむ波の音

十月四日陰曆八月十四日光清朗散步海岸

○待宵や夕餉に膳に松の月

十月五日中午陰雲翳天、歩海岸、夜半清朗

○けふの月人を寝かして晴れにけり

十月六・七・八日略

十月九日終日微雨、不出家

○海原は見渡す限り山もなしいづこをさして白帆くくらん

(癸祭書屋日記より)

## 「氷魚」のことから (164) 岡本八千代

うちの庭のま<sup>ま</sup>中に、自生えの百日紅があかあかと燃えるように咲いている。——私は、年々歳々何の木かまったくわかなかったので、疑問のままうち過ぎていた。——。

それが咲き出してやつとわかつたのであつた。人の年頃でいえば十一、二歳かしら。まだ茎も細く丈も低い。しかし、今年はおかに花が美しく大きく咲いている……。

現在の十一、二歳といえば、中学生くらいであろうか。おしゃまであつてもやはり純粋な少年少女と信じている私。

やはり今回も子規の少年時代に目を向けて書きたい。子規全集別巻三・回想の子規(二)の頁166に「子規の少年時代」があつた。これを繙<sup>ひもと</sup>く。書いた人は三並良<sup>はなみ</sup>という人で、子規の従兄弟半に当るといふ。彼氏は、慶応元年生まれで、後にドイツ語学者にして哲学者。第一高等学校、松山教授を歴任した。昭和十五年に歿せられた人。子規にとつては、「益友」としての友達のひとつであつた。因<sup>よ</sup>に、秋山直之は「剛友」、夏目漱石は「畏友」として交際をしていた。他に子規は「何々」として親友を多くもつていたが、ここでははぶく。

子規の母が三並氏の従姉であつたので、子規と三波氏とは再従兄弟だったのである。三並氏には兄弟はなし。子規には妹の律さんひとりだったので、子規と三並氏は兄弟のように

していたらしい。子規の行く処、子規の買うものなら三並氏も買うことが許されるほどだつた。だから、子規には祖父、三並氏には伯父に当たる人、大原観山先生に素読を教わつていたのだつた。

二人の勉強は、毎朝五時頃には相携えて先生の処へ行くことからはじまつた。先生にとつての升<sup>のぼ</sup>(子規の幼名)は初孫幸(三並氏の幼名)は、やはり漢学者の松陽先生の孫たつたので、二人とも観山先生が教えられたという。先生は二人共、可愛がつて、力を入れて教えて下さつたとふりかえつてゐる。

子規は、この頃から「二葉からの香しさを見せていた」ので、先生の満足を得ていたという。

またその頃は、もはや断髪してゐる人々が多くなつてきた時だつたのに、彼ら二人は、観山先生が断髪されなかつたので、自分たちも断髪しなかつた。ところが松山城下では二人だけになつてしまつたので、三波氏の父親が観山先生に「断髪の許し」を嘆願したのであつた。先生は、「もうそんなになつたのか」と許されたのだつた。父親がその事を升と幸に伝えたので、「私共は悦んで、断髪屋へ行つた」とある。おもしろい二人のエピソードではあるまいか。ノボさんとコウさんの少年の頃のまじめさ純粋さ、そして幼ない頃からの勤勉さ、親や祖父にも従う柔軟な心にも感動してゐる私である。——作文から今少しそれて、彼らの少年時代を探りたいと思いつつ。

## ことのはスケッチ(429) 今泉由利

### 『貫名海屋 私注』⑨

お濠に面し、帝国劇場ビルの9階にあり、皇居外苑を望むロビーは、静かに鎮まる、出光コレクションを展示する出光美術館に於いて、幕末、明治、大正を活躍した「富岡鉄斎の没後90年展」が開かれていた。

今までも、今も、いつもいつも、この美術館に来て、時を過していた。そして今また、富岡鉄斎に浸る。

富岡鉄斎三十二歳の俳画、大田垣蓮月七十七歳の自筆和歌。この二人の合作になる「十二ヶ月図」。(三河アララギ八月号「貫名海屋 私注」⑧に掲載) 素晴らしい融合に、お互いの信頼が思われ、立ち去り難い。

大田垣蓮月、四十二歳の夏、養父が亡くなり、それまで庵居していた知恩院を離れ、京都岡崎へ、北白川、聖護院村、西賀茂へと移り住み、当時京都を代表する文人達、貫名海屋、田能村竹田、円山派画家の中島華陽、宮中歌人の税所敦子、歌人の小沢蘆庵、本居宣長、上田秋成と目眩くばかりの交遊。影響を受け合い……。そんな様子を思いえがきながら、鉄斎の一作、一作、見入る。

帰りがけ立ち寄ったミュージアムショップに表示があった。「鉄斎画の魅力」笠嶋忠幸博士の特別講義(大学レベル

に準ずる)という。申し込みをした。

後日、休日の美術館内での講義だった。

膨大な資料より、研究され尽くされた本当のことをお教えいただく講義は、独り善がりとは異なる、力強い鉄斎を感じるのでした。

休憩中の雑談から、笠嶋先生が「鉄斎が、貫名松翁(海屋)の肖像画を描き、松翁に届けた」という件があり、飛び上るほどびっくりした。

「貫名松翁書画集」田中双鶴編の最初のページに「貫名松翁書見之図」谷口藹山画とある。

「海屋の自画像はないかどうか」「背景が少し異なる同類の画」もあり、なんとなくミステリーだったが、先生は「その画は、鉄斎が描き、海屋の弟子の谷口藹山が模写したのですよ」と教えて下さった。

鉄斎の「蓬莱仙境図」に似た構図、松翁の書を読む姿。やはり、交互する付き合いの深かったことを確信した。

蓮月尼は、海屋から「書」などの影響を受け、海屋は、お酒を酌み、微醺を帯びると、蓮月尼の「山ざとは松のこゑのみき、なれて風ふかぬ日はさびしかりけり」この歌を低く吟じたという。

私も、蓮月尼手びねりの蓮の葉の型に和歌の彫られた酒盃をもちだして参加しよう。

鉄斎画の貫名海屋肖像を眺めていた。気付いた。私の知っている顔、貫名泰比古も(後の高山泰比古)に似ている。



## 編集室だより【二〇一四年 七月】

○奥多摩の山の至る所に山百合の花が咲いていた去年。今年はどうして山百合が咲かないの？野生動物、猿や猪が百合根を掘って食べてしまうのだと！

○養殖ヤマメの受精卵を28度のぬるま湯に15分間浸ける、普通のヤマメの2倍の染色体をもつ三倍体とよばれるヤマメができる。この魚は、産卵期になっても卵が育たない、産卵後に死ぬということがないから、寿命がのびて大型の「奥多摩ヤマメ」になる。燻製にすると非常に美味。

○享保十八年、水神様の霊を慰めるための「両国川開き」のはじまり。

上流向に小波をたてる、隅田川を吹き抜ける風のもと、更科そば、古今の鶏弁当、かき水はイチゴの味で。

○不忍池の蓮の様子に出掛ける。このあたり縄文時代には東京湾の入り江であったと。

蓮が池一面に繁殖していて、美しいと共に不思議な心もちになる。

○暑いから寝る所を探していて、畳を替えようと思いたった。たちまち青い新しい畳になった。日本に居る

んだな！と思う。

○聖観音仏頭を彫りはじめる。千手観音とか十一面観音とか、優美なお姿の観音です。「結び髪」に宝冠で特色。

○清澄庭園の中の涼亭に於いて、佐藤喜仙さんの追悼会。去年のこの日、「この涼亭で毎年続けてゆきましょーね」と話したことがかり思われます。

○世田谷美術館へ。ボストン美術館、華麗なるジャポニスム展。印象派を魅了した日本の美。ああ見える。こう考えられる。と他の人の描いたものを、解説することは不謹慎だと思う。それぞれの人が、勝手に判断し、楽しめば良いことだと思う。

○等々力不動尊をお参り。そこから階段を下ると、深い木々の溪谷があらわれる。東京の町の中の下方に！驚く。滝となり、山肌から湧き出る水を加え、溪谷となる。溪谷は、涼しい風を共なつて。

○ペリート・モレノ氷河。アルゼンチン、パタゴニア、サンタクルスの南西部、ロス、グラシアール国立公園。アルヘンティノ湖まで進んできた最先端で氷河が崩れ落ちる。すさまじい地球の轟き。セリーナさんと私、ずつとずつとこの景色の中にいた。あんな所にも、平気な顔をしていったんだ！と思ひ起す。

## 和菓子街道 (95)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(18)

天保元年(1830)創業の福德餅は、元は松阪大橋の手前の街道沿いにあったという。先代の頃、松阪市街の街道沿いに移転してきた。店内には明治時代に使っていたという大きな茶釜がでんと据えられており、茶店から出発し、旅人に湯茶を振る舞ってきた往時が偲ばれる。

江戸時代の創業当初、この店は名もない茶店だった。しかし、京から伊勢参りにやって来た旅人がこの店の餅菓子をいたく気に入り、「福德餅」と名付けたそうで、それがいつしか店名にもなったのだという。

茶店時代のように店内の喫茶スペースで頂くことのできる福德餅は、テニスボールを半分にしたような大きさと形で、頂に「福」の字の焼印が押されている。注文してからこしらえてくれるから軟らかく、まだほんのりと暖かみが残っている。大福餅のような餅菓子なのだが、大福



という言葉では物足りない気がするほど、ぎっしりと餡が詰まった存在感のある丸い餅菓子なのである。なるほど、旅人の命名は言い得て妙だ。

「福」印の絶品餡入り餅

#### ◆福德餅

住所：三重県松阪市湊町239

電話：0598-21-1685

## お知らせ

▽九月号の原稿は、九月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

△暑い暑い、どうしようもなく暑い。クーラー嫌いの私もこの息苦しさにエアコンのスイッチを入れた。

さあ校正を始めよう。私にとっても大切なお仕事、それぞれの作者のお顔を思ひ浮かべながら、原稿とゲラ刷りを付け合わせ思わず笑みを浮かべ、相槌を打ち、納得、そして、悲しいお歌には、涙してしまいます。でもきつと立ち直ってくださると信じています。短歌には立ち直らせてくれる何かがあると私は思っています。

暑さはまだまだ続くことと思います。呉々も熱中症にならないように、お気をつけください。(小野)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年八月二十五日印刷 第六十一巻 第九号  
平成二十六年九月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

### 発行人

平松 裕子・山口千恵子

### 発行所

今泉由利  
三河アララギ会  
〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A  
TEL (〇三)五九二四一〇六五

### URL

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三三九  
E-mail yur188@cronos.oon.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜 創 美